（別紙２）

論文審査結果の要旨

氏名　曹　峰

本論文は、古代中国の諸子の思想にみられる「名」というテーマについての研究である。この「名」に関しては、これまで主として「名家」と呼ばれる学派等で説かれた論理学に絡んで論及されるのが通例であったが、本論文は戦国中晩期から漢代初期における政治思想とのかかわりの重要性を発見し、従来にない斬新な観点から研究を行ったものである。

本論は二編からなり、まず上編において、「名」にかかわる古代の重要な政治的問題を示しつつ、「名」の政治思想史の枠組み・体系作りを試みている。そして下編において、「名」の思想史上最も重要な言説として、孔子の「正名」説、『荀子』の正名篇、『管子』四篇と『韓非子』四篇、馬王堆帛書『黄帝四経』、『尹文子』を取り上げ、それぞれの場合に即した個別的な分析と研究を行っている。上・下編は互いに証明あるいは補足しあう構造にもなっている。

全体としての問題設定に窺える見識に加え、各所で論じられている諸問題――「形名論」は「正名論」や「名実論」より遅く現れて黄老思想と関係深いこと、前期・後期の二種類の名家を考えるべきこと、「名」と「法」は同質の性格をもつ場合のあること、孔子の「正名」説は実際には「名分論」や「名実論」と直接の関係がないこと、君主専政制度にとって「道」―「名」の関係が必要であったこと、『黄帝四経』の思想構造は「道」「名」「法」三者の関係から分析すべきこと、「名」の政治思想史において『尹文子』は特に重要なテキストであること――等に対する考察は、それぞれ要所を剔抉した本論文の優れた部分と認められる。

同じ文章の引用が全篇で何度となく繰り返されるなど、文章記述の技術的な問題等はあるが、従来の研究を十分博捜して検討を加えつつ、２０００年余り看過もしくは誤解されてきた思想史の一側面について、伝統的な諸文献と近年の出土資料をほぼ的確に用いて明らかにし、古代思想史の全体像にも再考の必要を感じさせる内容は十分に評価できるものである。よって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に相当すると判断する。